

---

## 改・第2の人生は波乱の人生！？

黒一文字

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

改・第2の人生は波乱の人生！？

### 【Nコード】

N8878Y

### 【作者名】

黒一文字

### 【あらすじ】

少年は事故で死んだ。

少年は神によって少女となり生き返る。

少女はネギま！の世界に生きる。

これは『第2の人生は波乱の人生! ?』の改訂版です。感想お待ち  
します

## ブローグ1

俺はいつもの日常のように高校に通い、そして、いつもの日常のよう  
に帰宅するはずだった。

いきなりトラックが突っ込んで

俺の16年の生活が幕を閉じた。

「ううっ、ここは」

目を開けると何もない空間にいた。  
確か俺は死んだ筈なのに。

「それは私が呼んだのです」

声をした方向を見るとそこには見た目15歳ぐらいの少女がいた。

「この度は申し訳ありませんでした」

うん、とりあえずトラックが突っ込んできたのは私の不手際ですって所かな。

「あなたはエスパーですか？」

うん、俺にはそんな力は無い。

「とりあえず、こちらの偽善としてあなたを転生させます。どこがいいですか？」

うん、迷うな。あ、あれでいいか。

「じゃあ、ネギまの世界で」

「わかりました。どのような力が欲しいですか？」

「えと、それじゃあ」

- ・ 不老不死
- ・ デバイス、ユニゾンデバイス
- ・ 魔力、気最大級
- ・ とあるシリーズのレポートと一方通行のレベル5＋幻想殺し・・・

- ・・・・だっけ？
- ・変身能力
- ・魔法媒体の指輪

「ず、ずいぶん多いね」

「しょうがないよ」

「変身能力か・・・元の姿は？」

「あんたの姿を10歳ぐらいで」

「つまり女の姿？」

「ああ。女子の生活も体験したくてな」

「デバイスは？」

「待機はネックレス。起動時は杖のベルカ式で。カートリッジは30発」

「ユニゾンデバイスは？」

「リインフォース2（ツヴァイ）と同じで」

「・・・よし。あと時間は？」

「大戦の時なるべく『紅き翼』がいるところの近く。そうだな、ナギ達がしゃぶしゃぶしているとき」

「OK。終わったよ」

「ありがとな」

「いえいえ。それではいつてらっしゃい」

こうして、俺は第二の人生を歩み始めた。

## プロローグ2

「うーん。ここどこ？」

目覚めると私は森の中にいました。

「て、あれ？私の口調が変わっている」

パサッ

「ん、神様からの手紙？」

とりあえず読むことにしました。

『これを読んでいるときにはもう着いていることでしょう。自分の名前を決めたらこの紙の下に書いてください。あなたが頼んだ能力の他に魔法の心得を追加しています。デバイスはあなたの首にかかっています。あなたが名前をあげてください。ユニゾンデバイスの方はもう少しかかります』

「これかな？うーん……決めた。あなたの名前はキリエだよ」

『了解しました。主』

「私の名前どうしよう。日本人名前の方がいいな……あ、あれでいいや」

かきかき……



私はこう書いた。

結衣咲

シィ

## 設定

結衣咲<sup>ゆいさき</sup>シイ

年齢 外見10歳

身長 もとの姿で132

体重 秘密

能力

魔力、気

最大級

テレポート&一方通行&幻想殺し  
とあるシリーズから。

魔法の心得

あらゆる魔法が使える。

不老不死

老けないし、死なない

変身能力

自分が想像したものに姿を変えることができる

## デバイスについて

待機型はネックレス。戦い時にはなのはのレイジングハート、シグナムのレヴァンティンなどのモードとして戦う。バリアジャケットはその武器の使用者のバリアジャケットを纏う。

## 第1話

「で、ここからどう行けばいいの？」

『私のセンサーで探してみます』

はい、神様の手違いで死んだ結衣咲シィです。さっきから歩いてい  
るんだけどどこに行けばよいのだろうかと考えていたらキリエがセ  
ンサーを使ってくれた。

「あはは、もう少し近くに落としてくれればよかったな」

『主、現実逃避の途中ですが魔力を察知しました』

「ホント！ありがとう、キリエ！でどこに？」

『今主の視線から北東の位置です。距離は100mです』

「よし、見つかったなら早速しゅっ」

キュル

「／／／／／お腹減った」

ナギside

オッス！俺はナギ・スプリングフィールドだ！今は詠春と師匠とア  
ルで詠春の故郷の料理『鍋料理』を食べるところだ。

「じゃ、早速肉を」

「あ、ナギ！おまつ、何肉を先にいれてるんだよ！」

「・・・・・・・・」

「いいじゃねえか！旨いもんから先だよ！ホラホラ」

「バツ、バカ！火のとある時間差というものがあつてな」

「・・・・・・・・」

「あーうつせ！うつせーぞ、詠春！・・・・て、アル？師匠？ど  
うしたんだ？」

さつきからだんまりだから気になったんだけど。

「お主等。きずかぬか？」

「「は？」」

「ええ、強大な魔力を持った誰かが近づいてきますね」

「あ、ホントだ」

『お、お腹減りました』

「「「・・・・・・・・は？」」」」

今、何て？

「あ、いた。あははゝ（バタツ）、あ、この川を渡ればいいんだね」

「」「」「渡ったら駄目だ（です）（じゃ）！」「」「」

シイ s i d e

た、助かった。いくら不老不死でも空腹は最大の敵だ。

「皆さん、ありがとうございます。お陰様で助かりました」

「いってそれぐらいはお互い様だろ？」

「はい！それで……えと」

「どうかしましたか？」

「お礼をしたいので一緒に居ていいですか？」

駄目元でお願いしてみると

「おう、いいぜ！」

「「よろしく頼むな（お願いします）」」

「さっきの魔力もナギと同じ位じゃしのうち」

「……今思ったのだけどこんなに簡単に入れていいのだろうか。」

「はい。あ、私は結衣咲シイです」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。ナギでいいぞ」

「アルビレオ・イマです」

「ゼクトじゃ」

この人、何でこんなに小さいのにナギに師匠と呼ばれているのだろう？

「青山詠春だ。ところで結衣咲って」

「あ、出身は日本です」

「そうなのか」

「さて、鍋食おうか！」

それから私たちは軽い話をしながら鍋料理を食べていたら

ドゴンッ

剣が降ってきた。

いきなりだったので空中に舞った肉を取れなくて泣きそうになった  
らアルが肉を数枚くれた。

「あとでこれを来てください」

「スクール水着は露出が多いから、少ないものならいいよ」

アルは何でロリコンなんだろう？

「ナギ、私がいきたいからいい？」

「おう、いいぜ」

（キリエ、武器のみセットアップ）

（了解です）

キリエが起動すると手には某魔法少女のな はが使っていた武器に似ている杖が握られていた。

「うお！」

「凄いですね」

「転移魔法の類いじゃろつか？」

うん、ゼクト。転移魔法の類いじゃないよ。

「それじゃ、いきます！」

私が行ったときに丁度詠春が敗れるところだった。

「キリエ、カートリッジロード」

『分かりました』



ガシャンッ

「全力全壊「ん、なんだ？」スターライト」「うお！あいつか！」  
ブレイカァー！！」

「グオアァー！！」

フッフ、いい威力だ。

三人称 side

これを見ていた紅き翼の皆はこう語る。

魔王・・・と

## 第2話

「よし、いくぜ！お前ら」

はい、どうも。結衣咲シィです。今は連合側のグレート＝ブリッジ  
って言うところに来ています。

「ナギ！落ち着いて！まだ始まっていないから！」

「よし、俺もいくぜ！」

「ラカン！落ち着けと言っているだろうがー！ー！ー！」

「ぐふおっ！」

全く。今回は全長300キロに亘って屹立する巨大要塞「グレート  
＝ブリッジ」を陥落されたので奪還するという作戦が実行されます。

「・・・よし、時間が来たよ。ナギ」

「よし、行くぞ！」

「「「「「ああ（ええ）（うむ）（はい）！」「」「」」」」」

さて、行き（ちよつとまって）って、久しぶりだね。神様。

（ユニゾンデバイスが出来たよ。今から送るね）

あ、ちよつとま（シュンッ）

「「「「ツ!?」「」「」」

あゝあ。警戒体制に入ったよ。

(「う、ごめんなさい」)

まあ、いいけどね。何とかしようかな。

「みんな大丈夫。この子は無害だから」

とりあえず納得してくれた。理由はシィだからと……少し傷ついたよ。

「あ、そうだ。あなたの名前はリインフォース2（ツヴァイ）だよ」  
ほんとに初代がないけど。

「はいです、マスター!」

うーん、リインはこれだから可愛いんだよねー。

「それじゃ、さっそくユニゾンしようか。リイン」

「はいです!」

「「ユニゾン・イン!」「」

ユニゾンすると私の髪は白に近い色になった。

注) シイの元の容姿は金髪で腰までありツインテールにしています  
(リリなの・フェイトスタイル)。

「じゃ、いつてくるね」

「あ、ああ」

私はとあるシリーズのレポートで敵陣の上空へ移動、そして

「キリエ、モード『夜天の書』&『シュベルトクロイツ』」

『分かりました、主』

私は魔方阵を展開し、ある魔法を唱える。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて撃ち貫け、石化の槍。『ミストルティン』」

ナギside

「『千の雷』!」

ふう。つか、敵多すぎだろ!?

(ナギ、下がってください)

ん、アル?どうしたんだ?

（シィさんが何かしようとしています。あなたの上です）

アルに言われてみるとシィが魔方阵を展開して……で、何だ？あの魔方阵？

（ナギ、早く！）

お、おう。

俺が下がったら、石の槍が降ってきた。……あ、ええ！？石の槍が当たった奴等が石化した！？

……で、回復している奴がいるけど全く治らない。もしかして、永久石化付加の石の槍か？

そうしている内にシィが光線をはなって敵陣を後退させたので俺たちの勝利となった。

結衣咲 side

「おい、あの石化の槍はなんだよ！あいつら石化したぞ！」

「しかも、直せていませんでしたね。あちらには有力な治療師がいましたが」「あの魔方阵は何じゃ？見たこともないが」

「皆（皆さん）、落ち着いて（下さい）！」「」

「『『『『落ち着いていられるか（ますか）！！』』』』」

「『ええ！？』」

戦闘が終わり帰ってきたらいきなり質問攻めされた。しかも、めったに怒鳴らないアルも。

（はあ。キリエ、リイン、言おうか？）

（私は構いません）

（リインも大丈夫です）

あれ？リインって自分のことリインって言ってたっけ？

「まずは石の槍。『ミストルティン』。

当たった奴を石化させる魔法。

なぜ石化が治らないか。それは、魔力の根元が違うから。

こちらの魔法使いは自分の流れる魔力を操り発動する。

それと違って私の魔法は自分の体内のリンカーコアという魔力源を消費して発動する。

因みに、私はこっちの魔法も使えるよ」

『そして、私はデバイスのキリエです』

「この子は武器となり、私を補助してくれる子だよ」

「リインはリインフォース2（ツヴァイ）と言っです。リインはユニゾンデバイスです！」

「ユニゾンデバイス？」

「ユニゾンデバイスは契約したものとユニゾン出来るの。ユニゾンすると魔力を増幅したり、そのユニゾンデバイスの魔法が使えるの」

「ああなるほど」

「するとリンさんはリンカーコアの方の魔法使いですか？」

「はいです！因みにリンカーコアを消費する魔法を使う人は魔導師とよばれるです！」

リン、その知識どこから知ったの？

神様『私が入れました』

何か変な電波が来たけど無視しよう。

神様『ひど！？』

因みにナギが『千の呪文の男』と呼ばれると同時に私も味方から『幾多の武器の少女』。まあ、キリエのモードを切り替えるからね。敵から『終焉の悪魔』と呼ばれるようになった。

・・・何で？

### 第3話

ナギside

「なんだよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「あつてほしい人がいる。協力者だ」

オッス。俺はナギだ。今回は奪還作戦の時に仲間になったガトウに呼ばれてメガロメセンブリアに来ている。

「協力者？」

「そうだ」

いきなり目の端に人が現れる。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。ウェスペルタティア王国……アリカ王女」

現れた人物は何か……姫子ちゃんに似ていた。

シイside



ナギがアリカ様と会談している間、私は戦争地域にいた。

「酷い……」

ここら辺は魔法世界で珍しい能力を持つ種族がいた集落だ。だが、戦争によって巻き込まれ、更に連合軍が脅迫などをして多くの人が死んだり、連れていかれたりした。リインと探したが生存者はいなかった。

「リイン、次行くよ」

「はい……」

私たちはテレポートで次の地域に行った

## 第4話

シイside

メガロメセンブリア某所

えっと………どういう事だろうか、これ？

『紅き翼を探せ！まだ何処かにいる筈だ！』

………何やったのかはわかった。ちなみに私はローブを被っているから見つからない。とりあえず、予想的には紅き翼の隠れ家がある『オリンボス山』に行こう。  
テレポートで行けるかな？

シュンッ

オリンボス山『紅き翼』隠れ家

シュンッ

で、出来た。正直出来るかわからなかったけどできて良かった。

『いいぜ。俺の杖と翼、アンタに預けよう』

ん？この場面ってあの26巻の最初のかな？

「そこにいるのはシイじゃな？」

「あ、バレた？」

「バレバレじゃ」

「「「「「・・・あ」「」「」」

「シイかの？」

「そっだよ、ゼクト」

「シイ」

「ん？」

そこには鬼も逃げそうな黒いオーラをまとった詠春がいた  
・・・な、何か詠春の笑顔が怖い。

「今までどこに行っていたんだ？」

「えっと、戦争地域に……（ガクガクブルブル）」

「嘘をつくな！！」

「ひう！？（ビクウッ）」

こ、怖いよー。

「詠春、落ち着いて下さい。何らかの事情で帰れなかったのでしょう。ほら、シイがこんなに怯えていますよ?」

「うつ、すまない……シイ」

「う、うん」

「よし、シイも戻ってきたから行くか」

「どこへ?」

「……どっか」

「……」

少しでも期待した私がバカだったよ。

## 第5話

【シイside】

「……………」

返事がないただのしかb「死んで……無い……よ……  
…」生きていたか。by黒一文字

ど、どうも結衣咲……シイで……す……。

一体何があったということですか。by黒一文字

〈回想スタート〉

「『闇の魔法』かあ……………」

『主なら大丈夫じゃないですか?』

私はナギ達と再会して二ヶ月がたった時にふと思い出したように呟いた。

「まあそうだね」

『死ぬ痛みはしますが』

「それは嫌なんだけど・・・」

そつ、いくら不老不死でも死ぬ痛みはする。私はその事で不安だった。

『何事でもチャレンジです！』

「まあいいかな。キリエ、オリジナルモード『ロッド（杖）』『セツトアップ』」

『了解です、主』

注）シイのオリジナルモードのバリアジャケットは紫を主体とした服です。

「キリエ、補助お願い。魔力放出20%」

『了解』

「デリラ・アルクス・メラーネ・・・契約により我にしたがえ高殿の王。来たれ、巨人を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稲妻。『千の雷』固定」

『固定率98%・・・行けます』

「掌・・・握！」

グッ、思っていたよりもキツイ！これをネギやエヴァは使っていたの！？

『安定率……29%！ダメです！主！！』

「いつ、ああああー！」

【ナギside】

ズガアアン…………

「な、なんだ！！」

今の雷だろ！なんで…………まさか！

「師匠！シイは！」

「シイならさっき雷が落ちた所じゃ！」

「くっ！」

とにかく、急いでシイのところへ行かないと！

「シィー!!」

俺達が着いたときにはシィが倒れていた。

「おいシィ！大丈夫か！」

「・・・・・・・・」

返事がない。・・・・・・・・嘘だろ？

『大丈夫です』

「お前はキリエ・・・・・・・・」

たしかではいす？・・・・・・・・だっけ？

『主はじきに目をさまします』

「そうなのか」

よ、よかった。死んでいるかと思った・・・・・・・・。

【side out】



回想終了

【シイside】

「それにしてもよく生きていましたね」

アルがそんなことを言い出した。

「確かにのう。ナギと同じ位の魔力じゃったしの。あれを受けたらほとんど消し飛ぶはずじゃ」

ゼクトが続く。……て、あれ？さっき私が使用した魔力は20%ぐらいだったよ？

そして、私はある点に気付く

「あれ、言ってなかったっけ？私は不老不死だよ？」

ピシッ

あ、固まった。なんかお約束の展開のよ

「「何iiiiiiiiiiii!!!」」」

み、耳が……

「何だよ、心配して損したわ!!」

ナギ、それでも心配して。

「わ、私は知っていましたよ？あなたと出会ってから姿が変わって  
いませんから」

アル、膝が笑っているよ？あの『angel beats!』直井  
文人みたいに。

「……………」

ゼクト、詠春、帰ってきて。ゼクトはほぼ不老不死だね？

「なるほどな……だから会員が増えているわけだ（ボソツ）」

ラカン、きこえているよ。会員って何の事？

こうしてナギの暴走、アルの強がり、ゼクトと詠春の現実逃避が落ち着くまで二時間かった。

数日後

「え、模擬戦？」

「ああ、そうだ」

詠春がいきなり提案してきました。詠春、そんなこと言ったらダメだよ。なぜなら

「おお！シイと戦えるのか！」

「俺も久々に暴れるか！」

ナギとラカン（バカ）がバトルジャンキー戦闘狂だから。

「いいだろ。それぐらいは」

「まあ、いいけど……」

しょうがなく、私は了承した。

アル「準備はいいですか？」

ナ&ラ&シ&詠「「「「OK!」「」「」

ゼクト「では、始めじゃ」

火蓋は切って落とされた。

・・・・次回へ！by黒一文字

「「「「ズザアアアアッ」」」」

## 第6話

〽前回のあらすじ〽

ナギ達と模擬戦をすることになったシィ……

結衣咲シィ

V S

ナギ・スプリングフィールド

&

ジャック・ラカン

&

青山詠春

「……………で、私ひとりいいいつ!?!」

シィは勝てるのか!?

「誰かつつこんでええ!?!」

（第三者視点 side）

「それでは・・・始め！」

ドンッ

アルの掛け声で試合が始まった途端にナギ、ラカン、詠春がシィに突っ込んできた。

「行くぜ！『雷の暴風』ッ！！」

（ええ！？無詠唱！？）

ナギが先制攻撃として『雷の暴風』を撃ってきた。

（クッ、『レポート』！）

シィはギリギリのタイミングで避ける。

「アーティファクト『千の顔を持つ英雄』！」

「ッ！？キリエ、モードオリジナル『剣<sup>ソード</sup>』！」

ガキキキキンッ

（って、よくそんな量の剣をその速さで投げれるね・・・）

ってそういうあなたも対応できるねby神

なぜか神様まで観戦している。

「クツ、数が多い……」「フツ!」っ!？」

考え事している暇を与えないと言わんばかりにどんどん追撃してくるナギチーム

「これで終わりだ、斬岩剣!」

ここで詠春が左から剣技を放った

ガキインツ

「なっ!？」

が、それはシィの左腕によって止められた。

「モード双剣」  
ツインソード

そう、シィは左腕に剣を隠し持っていたのだ!by神

アルside

.....

「.....のう、アルよ」

「……………なんでしょうか」

「先ほどから誰かの声が聞こえぬか？」

「ええ、聞こえますね」

「もしかしたらワシら以外にも誰かが見ているということじゃな？」

「ええ、そうですね」

「……………きずいて下さい、ゼクト。さっきから『b y 神』と言っている事に。」

ズドオオオン……………

「もしかして……………神様は……………いるのでしょうか？」

シイ s i d e

ぐつうう、最強クラス二人と準最強クラス一人じゃ勝てないって……………しょうがない、使うか。

『（主？）』



「（キリエ……『闇の魔法』を使うよ）」

『（なつ、ダメです主！）』

「（……大丈夫）」

『（……わかりました。ですが条件です）』

「（条件？）」

『（おかしいと思ったらすぐに解除してください）』

「（わかった）」

ガラッ

岩オモッ

『当然です』

キリエ、クールにつっこまないで。

「それじゃ、やりますか。キリエ、魔力放出5%」

『了解』

「デリラ・アルクス・メラネ……契約により我にしたがえ高殿の王。来たれ、巨人を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稲妻。『千の雷』固定」

『固定率97%』

・・・いける！

「掌握！！」

ナギside

ズドオオオオン・・・・・・・・

な、なんだ？

「大方、シイが何かしたのだろう。二人とも油断するなよ？」

「わかってるって。シイ嬢ちゃんも結構つえーからな」

・・・風が・・・・・・・・

パシッ

「ンゴハアッ！？」

「「なっ！？」」

俺が見たものは吹き飛ばされるラカンと・・・・・・・・雷を纏ったシ

イがいた。

「術式兵装……『雷天大壮』！」

シイ s i d e

「ふう……」

『主、大丈夫ですか？』

「なんとか」

「おいおい、冗談だろ？」

「冗談じゃないよ、ナギ……キリエ、モード『バルディッシ  
ユザンバー』」

『了解』

私の姿がフェイト・テストロッサそのままになる。

「ランサーセット」

『G e t s e t』

私の周りに光球が9つ現れる。

「雷鳴剣！」

詠春が刀に雷を纏わせ、つつこんでくる。

「『魔法の射手・連弾・雷の1001矢』!」

ナギが総計1001本の矢を放つ。

「オラァ!」

ラカンが腕を振りかぶる。

それらを

「くぐあああ!?!」

とあるシリーズのベクトルで操りそれぞれに返す。その追い討ちに

「『フォトンランサー』・・・ファイヤ!」

雷の槍で撃つ。そして

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ、いま導きのもと降りきたれ・・・バルエル・ザルエル・ブラウゼル

」

私の周りにさつきよりも大きい光球が現れる。

「ぐっお。。な、何だあれは?」

そして・・・放つ!

「『サンダーフォール』ッ!!」

ズガシャアアアアン…………

…………

「キリエ」

『何でしょう?』

「大丈夫だね?」

『大丈夫でしょう』

アル&ゼクト

「「シイ

」」

「…………ここまでとは…………」

「…………あなたもバグキャラでしたか…………」

## 第7話

シイ s i d e

「へ、仮契約？」

「そうです」

何かいきなりストレートに言われたよ。

「何で？」

「最終決戦だからです」

「……………契約方法は？」

「キスです」

いや、わかっていたよ。でもね……………まだ彼氏とかがいらないのにキスなんてえええ！！

あなた、元は男だというの忘れているねb y 神

「大丈夫です」

「ふえ？」

何か案でもあるのかな？

「ナギも初めてなので」

「余計ダメだよおおお！！！！」

「シイ、諦めるんだ！（ガシツ）」

「えいしゅううん！！放せえええ！！！！」

詠春に後ろから羽交い締めにされた。ダメだ、動けない！…………ハッ！

「誰か助けてえええ！！変態に襲われるー！！！！」

「何て事を言うんだ、シイ！！とにかく…………諦める（ボソッ）」

詠春が何か言った瞬間、首筋に何かを当てられて、私は意識を闇に落とした。

目を覚ますと一枚の仮契約カードが。

「うう…………ヒグ…………初めてだったのに…………」

私は一晩中枕を涙で濡らした。

次の日

「シイ、使い方は「わかってるよ」そうですか」

仮契約した次の日、アーティファクトを試すことにした。カードには私と沢山の武器が描かれている。中には詠春の刀やアルの本、拳げ拳にナギの杖まである

「アデアット  
来たれ」

私がキーワードを言うとなぜか使い方が流れ込んできた

「ナギの杖……」

私が想像するとナギの杖が出てきた

「……え？」

アルが固まっている

「詠春の刀……」

想像すると次は詠春の刀『夕風』が出てきた。ナギの杖は出たまま

「なるほど……」



つまりは私が知っている武器を出せるという訳だ

「……ハッ！私は何を？」

今ごろ気付いたアルは放っておき、私はこのアーティファクトを『幾多の絆を結ぶ英雄』と名付けた。因みに沢山武器が書いてあったのはジャックのアーティファクトが原因だと思う

数日後

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ？悪の組織なんてそんなもんだ」

「そうだね。でもその周りは自動人形や召喚魔でいっぱいだよ？」

「ゲッ、マジか」

今私達は『墓守り人の宮殿』の見えるところにいる。最終決戦前だ、ナギでも真剣になってる。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました

！」

「おう」

あの人は……原作でアリアドネー総長になってる人だ。……名前忘れた。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ！それで、あの……ナギ殿、シィ殿」

「ん？」

「どうしたの？」

顔が赤いよ？

「ササササインをお願いできないでしょうか？」

「「いいぜ（いいよ）」」

「そ、尊敬してました」

サインを書いて渡す。……こらジャック、アル、笑うな。

「とりあえず、行くよ。ガトウさんもなるべく早くお願いします」

『わかった』

「キリエ、モード」ボウ『弓』

『了解です』

「リイン、ユニゾン」

「はいですー！」

「ユニゾン・イン」

私は弓を引く。そしてキーワードを言う。

「キリエ、カートリッジロード」  
ガシャンッ

ロードすると魔力で構築された矢が現れる

「リイン」

『はいです。氷の力よ、我が主に力を！』

「行くよ……『アブソリュート』」

私は数キロ先の召喚魔に向け、弓を放つとその召喚魔の周り一帯を氷で覆い、砕け散った。

「行くぜー！！」

ナギの声で全軍突撃した。

三人称 side

墓所に着くと仲間を連れたアールウエックスがいた。

「やあ『千の呪文の男』またあったね。そして初めまして、『幾多の武器の少女』。僕達もこの半年で君達に随分数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう」

「ナギ、私は姫子ちゃんのところに行くから！」

「おう！」

「行かせると思っかい？」

アールウエックスがそう言っていると石の槍が数本シィに飛ばされる。しかし

「遅いよ！」

すべてかわし、奥に行く。

シイside

「・・・・・・・・どこ?」

しばらく歩いたら迷ってしまったよ。どうしようか・・・・・・・・て、あれは・・・・・・・・

「ほう、人形共と戦っていたのでは?」

・・・・・・・・いましたよ造物主。どうしよう・・・・・・・・選択肢は

・戦う

・話す

・逃げ・・・・・・・・られない

逃げられないの!?でも、話すがあってよかった。

「あなたが造物主・・・・・・・・」

「そうとも呼ばれてる・・・・・・・・ふむ」

「・・・・・・・・?」

イメージ的には顎に手を当て何か考えているポーズだね。え、何でイメージかだって?だって顔見えないし・・・・・・・・

「おい」

「・・・・・・・・はい」

「お前、私のも「ならないよっ!」・・・・・・・・そうか」

納得した感じになると造物主は後ろに魔法陣を展開し、砲撃を放つ。

「っ!?!『フォースフィールド』!?!」

何でも防ぐフィールドを張り、砲撃を防ぐ。

「見事・・・・・・・・」

「どっつもっ!?!」

私は外へ逃げたが造物主は来なかった・・・・・・・・

ナギside

「見事・・・・・・・・理不尽なまでの強さだ」

「黄昏の姫御子は・・・・・・・・どこだ?消える前に吐け」

俺はボロボロだが白髪の奴を戦闘不能にした。姫子ちゃんの事を聞こうとしたが

「フ・フフフ・・・まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと思っ  
ているのかい？」

「なん・・・だと？」

こんな答えが返ってきた。黒幕がこいつじゃない？

バスッ

・・・・・なっ！？

「ナ・・・ナギイ！！！！」

シイside

「っ！？遅かった！？」

私が着いた頃にはナギとアールウェンクスが打ち抜かれていた。

「誰だ！？」

ジャックが向いた先には、先ほど私が見たときには追いかけてなかった  
筈の造物主がいた。しかもさっきよりも莫大な魔力を感じた。

「いかんッ！！」

やばい。ゼクトの『最強防護』やジャックの『気合防御』で防げる

魔力じゃない。私は縮地で移動し

「「シイ！」」

「くっ！？最大魔力！『フォースフィールド』！！」

その瞬間膨大な魔力砲が放たれた。

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・」

・・・・・・・・あれ？ここは・・・・・・・・

「目を覚ましましたか？」

横を見るとアルがいた。

「アル、どうなったの？」

話を聞くと私は結果的に防ぎきり、そのまま魔力切れで倒れたらしい。その後、ナギとゼクトが造物主を追い、倒したがゼクトが戻らなかった。



「……結局、私は何も出来なかった……か……」

「そうでもないです。あなたは私達を守ってくれたじゃないですか」

「……そうだね。それよりアル、何かあるでしょ？」

「ええ。終戦と世界が救われた記念式典です」

「面倒くさいなあ。でも行かないと」

私は体の異常がないか確かめ、下に降りた。

## 第8話

シイside

「『ルインクラスト』」

ズドドドドドドオオオオン……

『ぐあああああ！？』

『やめろっ！？やめてくれっ！？』

正直うざったい。

「えつげないですね。シイ」

「別にいいじゃん」

私たちはケラベラス溪谷に来て、アリカ様救出作戦を実行していた。まあ、一方的な虐殺だけだね。あ、一応非殺傷だよ？殺したらいけないからね。

「私ちょっと用事があるからこのまま抜けるね」

「はい」

これが5年前の出来事だ。ん、何でこんなに時間が跳躍しているのかだって？それはわからないよ。結局ナギとアリカさん……アリカさんは婚約したし。でも、わかったことがある。それは

「貴様が『幾多の武器の少女』か？」

「何かな？」

命を狙われている。気配からして二人かな。殺気もある。

「ここで死ね！」

雷撃が飛んできた。ん、よく見るとアールウェンクスと似ている上

に服が同じだ。もしかして……あれか。

「なるほど、二番目と言うことだね」

一番目と攻撃方法が違うのはワンパターンにならないためだろう。

「ヴィシユタル・リ・シユタル・ヴァンゲイド。契約により我に従え高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稲妻！！」

不味いな。ナギランクの魔力だ。どうしようかな？

「『千の雷』！」

とりあえず避けよう。

バックステップをするとそこに雷が。

「『おわるせかい』」

……あ、やば

パキヤアアアン……

……閉じ込められたよ。でも、大丈夫かな？

『フレアストーム』

「なっ「……っ」！？」

氷の中心から炎の渦をだし、氷を溶かす。でも

「あゝダメだ。中心部しか溶けなかった……」

今言った通り、溶けたのは中心部のみ。閉じ込められた感じかな。時間がかかると普通の人は凍死する。

「フ、そのまま凍死するがいい」

そう言つて、二番目と髪が長い人はどこかに行ってしまった。

・・・アホでしょ？

シュンッ（テレポートで脱出）

「ナギは一体どこにいるやら」

私はどこかへと歩き出した。

ナギside

「ヘックシッ」

「む、どうしたんじゃ？」

「さあ、誰かが噂したんじゃないか」

「ナギ、必ず三年後だぞ？」

「おっ」

## 第9話

「おい、！」

誰だろ？聞き覚えがある

「君、帰るよ」

「ああ、わかったわかった。だから引つ張るな」

「……思い出した。これは

「っ！？二人とも！！」

「「？」」

キキードンッ

俺<sup>わたし</sup>の記憶だ。

シイ s i d e

「……………」

夢から起きると目の前に木が見える。麻帆良学園は近くにあるが夜に行くとは怪しまれるため、野宿をしたのだ。

『おはようございます、主』

「おはようです！」

「おはよう、キリエ、リイン」

挨拶をするキリエに挨拶をし起きようとするが動かない。何でだろ？

『主、地面に寝ていたからでは？』

ああ、納得。

「よし、行こう。リン、キリエ」

「『はい（ですー！）』」

・

「で、貴様は誰だ？」

はい、只今麻帆良中学の学園長室に來た瞬間金髪幼女に絡まりました



「幼女言うな!!」

心読めたんだね

「私の名前は結衣咲シィだよ」

「何だと!？」

名前言ったら顔を青ざめながら驚かれた。・・・何で？

「あ、あの『幾多の武器の少女』や『何あの子致命傷なのに来るんだけど!？』の結衣咲シィか!？」

うん、間違っちゃいない。後者の二つ名は大戦中に失敗して胸に風穴開けられたときだね。

「そうだけど・・・実演しようか？風穴開けてからゾンビみたいに這いつくばるの」

「やらんでいいわ!!」

ああ、面白いな

「たく・・・私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。真祖の吸血鬼だ」

「へ」

「・・・驚かないのか？」

「別に……私のまわりには化け物揃いだから」

ナギとかジャックとかナギとかジャックとか……

「うつほん！もうよろしいかの？」

そこには頭の長い妖怪ぬらりひょんがいた」

「聞こえとるぞい……」

あ、座って『の』の字を書き始めた

「おいジジイ。いじけていないで話しろ」

「そうだね。早くしてください、ジジイ長」

「その呼び方は一番酷いぞ!!」

「結衣咲……それは流石に酷いな……」

あら？何か不評だね

「というわけでナギは？」

「バツサリ来たな。ナギならとっくに行つたぞ」

「何処に？」

「さあな」

むう、聞きたいことがあったのに……

……あ

「用事思い出した。学園長、教師になる話はまた今度に」

私がそう言つと学園長は書類を持ったまま固まった。

「じゃあね」

私はレポートである場所に向かった

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

シュンッ

「アル〜！いる〜！？」

「はい。お久し振りです。シィ」

え〜と、ここは図書館島の地下だね

「どうやってここがわかったのですか？」

「勘」

「勘に頼るのはラカンだけにして下さい」

「いいじゃん、勘も大切だよ。ん、この紅茶はいいね」

「ありがとうございます」

アルの入れるものは殆んど美味しいからね

「さてと・・・行こうかな？」

「何処にですか？」

「造物主の所」

ピシッ

あ、アルが固まった

「シィ、冗談はよしてください」

「冗談だよ・・・１％」

「殆んど本気じゃないですか!？」

「大丈夫だよ」

私はアルに優しく笑う

「私は絶対に帰ってくるよ。キリエ、モード」  
『「トド・オブ・ザ・ライフメイカー」造物主の掟』」

『了解です』

「なっ!？」

起動すると私は黒マントに包まれる。何故かキリエに組み込まれて  
いたモードがあつた。調べてみたら『造物主の掟』、それも『最後  
の鍵』<sup>ドマスターキー</sup>だつた。あつていいのかな？

「行つてきます、アル」

「…………お気をつけて、シィ」

「うん…………リケロード」。造物主の元へ」

私は魔法世界に行つた

## 第10話

シイ s i d e

シュンッ

「……………久しぶりだね。ここに来るの」

墓守り人の神殿。魔法世界の大戦の終結した場所……………

「さて……………『リケロード』」

私は神殿内に入った

……………

「む、お前は……………」

「久し振りだね、デユナミス。大戦以来かな？」

「そうだな」

中に入ると紅茶を飲んでいるデユナミスがいた。まあ、好都合かな

「造物主に会いたんだけど」

「ブッ！」

「うわっ！？汚なっ！？」

「お前は直球で来るんだな」

「わざわざ遠回しで言う必要がある？」

面倒だし……………」

「……………」

念話中だね

「よし、この奥に主がいる」



「ん、わかった」

以外とすんなり行けたね。あ、デユナミスに伝えないと

「デユナミス、二番目何とかならない？」

「どういう意味だ？」

どういってね〜

「頭」

「それができたら苦労はしないな」

デユナミスも悩み人らしい。

そう考えながら造物主の元へ向かった

.....

しばらく歩くと広い場所に出た。確かここは……ジャックと  
フェイトがお茶していた場所だっけ？原作知識が曖昧になってきたよ

「お前は確か……」

「久しぶり、造物主」

ゼクトの体で紅茶を飲んでいる造物主を発見した

「まあ、今日は交渉に来ただけだね」

「交渉だと？」

「うん、それはね

私の体と引き換えにゼクトを解放して欲しい」

「何故だ？」

「……………私にはこの世界を魔力枯渇しない計画がある」  
プラン

「それはあり得ない。『完全なる世界』に封じないとこの世界は救われ」

「それは違うね」

造物主の言葉を遮る

「『黄昏の姫御子』の力……………」

「『マジックキャンセル  
完全魔法無効化』か……………」

「うん。その能力を逆手に取り、魔力枯渇を防ぐことが出来る」

「……………」

まあ、ここの原作知識は無い。何しろフェイトとネギが仲直り？し  
ところまでしか読んでいないからね

「……………わかった」

「いいの？騙しているかもしれないのに？」

「賭けてみたくなった……………としか言えないな」

わお、私は考えをねじ曲げないと思っていただけだね。そう考え

ていると造物主の身体から黒いものが出てきて、その黒いものが抜けたゼクトの身体が倒れたので支えてあげた。寝かせた後、黒いもの……造物主と向き合う

「じゃあ、始めようか」

「ああ」

黒いものが私に入ってきたとき

ドクンッ

「ぐっ!?!あっ!?!」

いきなり胸が苦しくなり、意識を失った。失う前にゼクトが目を見えたように見えた

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・

「  
・  
・  
・  
・  
・  
」

目をさますと真っ白な空間にいた。何も音は無く、ただ真っ白な世界に・・・・・

「造物主・・・・・」

「何だ？」

造物主に呼び掛けると目の前に黒の布を被った・・・・・アリカさんに似た人がいた

「あなたは・・・・・アリカさん？」

「それは私の今の子孫だ。私の名はアマテル」

「…………ゼクトは？」

「あの者なら既に目が覚めていると思うぞ」

「ならいいや。造物主…………いや、アマテルさん」

「何だ？」

「改めて、力を貸してください」

「いや、協力するのは私の方だ。私には考えることができなかった案を提案してくれたからな」

「そうだね。じゃあよろしく」

「ああ。ところで敬語とタメ口が交互になっていないか？」

あ…………

「…………てへ」

「…………」

「それじゃ！」

「何だ？」

「そりゃあ!！」

「なっ!?!」

私はアマテルに飛び掛かる

「あはは〜!」

「いや!ちよっ、やめ!あ、胸揉むなっ!?!?!?!」

「にやははははは!?!」

「いやあああああ!?!?!」

・  
・  
・  
・

「／／／／／」

「あゝ面白かった！」

「人で遊ぶではない！／／／／／」

「アマテルも乙女だね」

「．．．．．」

「ん？」

「そりゃあー！」

「にゃ！？」

「仕返しだー！！」

「えっ！？ちよつとまひゃん！？／／／／／」

「お前は弄りがいがあるな」

「私の名前は結衣咲シィだよーて、弄り！？何しようとするのさ！？」

「ん？弄り」

「なんでさ！？あ、ふぁん！／／／／／」



「ほれ、ここに息を吹けば……」

「ちょっとやめ！？ふあああ！？／／／／／」

『お主等いい加減に』

「ん（ふえ）？」

『せんか！！』

その後起きたら顔を鼻血で赤く染めて倒れている二番目<sup>バカ</sup>と同じく顔を赤く染めた（鼻血ではない）ゼクトがハリセン（鋼鉄ver）を持っていたので

「『何かすみません』」

アマテルと共に謝った

## 第11話

シイside

……暇だね

「マスター  
主」

「ん、何？」

椅子でだらけていたら3番目<sup>テルティウム</sup>が話しかけてきた。

「連合軍の戦艦がこちらにきています。30分もすればこちらに来ます」

「んゝわかった。皆がいらないから私とテルティウムしかないからすぐに行くよ」

「ハ、わかりました」

「よし、『リケロード』」

「へ、調整？」

神殿から少し離れたところに移動して神殿を調査する戦艦を見ていたらテルティウムがいきなり言い出した。

「ハ、私の任務にいささか支障が出ています」  
『よい。捨て置け』

因みにアマテルが話すときは念話が多い。なぜかは知らないけど。  
「ハ？」

『私がそう調整した……いや、あえて調整しなかったと言っべきか。テルティウム』

「ハ……」

『お前は1番目と2番目と違い、私への忠誠や目的意識を設定していない』

「しかし、それでは」

『よいのだ』

テルティウムの言葉を切る。

『つい調子に乗ってセクンドウムのパラメーターを色々MAXまで上げてみたらあんなのになった』

「「あ……あー……………」」

なぜか納得してしまう私とテルティウム。

『お前からは諸々取っ払ってある。いわば素焼きだ』

「なんかその言い方酷くない？」

『黙れ。……まあ、道具の身に目的がないのでは不具合も出ようがお前はそれでよい。思う通りに動いてみよ』

「ハ……………」

ズブッ

テルティウムは水の転移で何処かに行った。

『さて、どうする？』

「何が？」

『暫くは宮殿には戻れないのだ。どこにいくのだ？』

「どこに行くといっても……………あ……………」

『どうした？』

「ナギに会おうかと」

『サウザントマスター  
千の呪文の男が……なぜだ？』

なぜって……ねえ……

「親友だから」

『……はあ』

……何か呆れられたんだけど。

『……まあいい。しかし、どこにいるかわかっているのか？』

「大丈夫。探査魔法で見つけたから。『リケロード』」

私はナギの元へ向かった。

## 第12話（前書き）

ユニーク1000人突破

鳴神ソラさん感想ありがとうございます

## 第12話

シイside

シュンツ

着いたのは魔法世界にある1つの村だった。だがそこは何か……襲わ  
れたように荒れ果てていた。

「メガロのバカ共は……」

私にはわかっていた。バカ共が召喚した跡を残しているからだ。

『う……』

「っ！？」

確かに聞こえた。私は声が聞こえた辺りに行き、瓦礫があつたので  
退かしてみると

「お……かあ……さん……」

女の子がいた。だけど重傷だ。間に合うかわからない。

『主』

「わかってる！モード『クリアルヴィント』！癒しの風よ」

女の子の傷が治っていく。

[illegible]

しばらくしたら女の子の傷は完全に治った。だけど、身体の中まで治ったとは限らない。

主！2時の方角から生命反応が！

$$\begin{matrix} \lrcorner \\ \text{え} \\ \llcorner \end{matrix}$$

気付いたときには空を飛んでいた。着地して何かされた方向を見る



と

「やっと出やがったな！造物主！」

ナギ<sup>バカ</sup>がいた。

「……ナ」

「もう一発」

声をかけようとしたらナギが突っ込んできた。

「殴らせ（ブンッ）ろおおおおお（スガンッ）いだっ（ガラガラガラ）のわあああああ！！」

……今起こったことを説明するよ。

ナギが突っ込んでくる

私が手を払う

ナギが空中に飛ばされる

建物に激突

倒壊

はぁ……面倒な……

「ナギ、生きてる?」

「生きとるわ!」

あ、生きてた

「ごめん、条件反射でやってしまったよ」

「……ホントにシイか?」

「そうだよ」

「何で造物主なんだ?」

「えっと、それはね」

説明中

「　　という訳」

「「成る程な」」

いつのまにかいたアリカさんも含めて説明会をした。

「シィとライ……アマテルはどうするつもりじゃ？」

「うん……宮殿に魔力が溜まるのはまだです。だから今はやることも無いですし……ナギとアリカさんは子供産まれたんですか？」

「うむ、双子の男の子と女の子じゃ」

「そうなんですか」

……あれ？原作ではネギ１人だったような

「……名前は？」

「うむ、ネギとアカリじゃ」

……気にしない。私がいる時点で原作崩壊してるから気にしない。  
うん。

「あ、会いに行くならこれ持っていつてくれ」

ナギがそう言いながら自分の杖を出してきた。

「了解！」

それを受け取って転移の準備をする。

「あ、それとあいつらに会ったら俺たちは元気だって言っといてくれ！」

「ん、わかった」

そう返事をし、私はネギとアカリの村に転移した。

……原作から大きく離れてるけどどうなるんだろ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8878y/>

---

改・第2の人生は波乱の人生！？

2011年11月30日16時48分発行